萱

2020·12

風萱集

亀田虎童子

忘れしと思ひ出せしと秋うらら

二十世紀梨の謂れを剥きながら

老人の日や老人の手持ぶさた

月光の昨日をととひ明日もかな

十枚の賀状で足りる卒寿以後

PDF= 俳誌の salon

松下　道臣

夜に雨降らぬときめて梅を干す
ちよい悪を気取つてをりしサングラス
濡るるたび青鬼灯の色かはる
かたまりぬながむし前を横切つて
皮剥の皮を剥ぐとき息とめて

小島　良子

小鳥来る括りて重き新聞紙
芒原母船のやつて来さうなり
死に真似の蜘蛛に空気の動きけり
鉛筆の芯尖らせて颱風圏
金木犀夜の匂ひに変りけり

出牛　進

秋の風国勢調査語るとや
終活をうべなふ齢吾亦紅
雨粒を蘂に走らせ曼殊沙華
昼の虫ゴルフ中継無観客
読み終へること惜しみをる秋夜かな

PDF= 俳誌の salon

萱集

進選

坂鳥やそちらは武甲の深き山　埼玉　新沢　伸夫

レモン熟る村上水軍砦跡

姉さんかぶりおはぎ出来たと秋彼岸

星月夜ざらめ乗りたるメロンパン

栗の実や今後座席は一つ置き

無患子や歳経て母の心知る　千葉　中山　惠子

白菊や消す事出来ぬ住所録

うたた寝のテレビに覚めし夜長かな

秋灯や狐に出遭ふ銀座路地

ひたすらに生きる他なしそぞろ寒

ひとひねりふたひねりして次郎柿　東京　武田　未有

二合炊く日々の平和やうろこ雲

海のぞむ花野に光る忘れ水

暮れそむる花野離るるバスあかり

どんぐりのつぶて木立へ谺三つ

敬老日嫗は御座すあるがまま　東京　ふなかわのりひと

庭いじり終へてちちろのこゑさはに

一叢の憤怒の焔彼岸花

孫応ふいつもと一緒今日の月

以下略とできぬ現世秋の夢

夕花野今来た道を戻りゆく　埼玉　鈴木　愛子

竹帚笊籠の庭赤とんぼ

火花散る鍍金工場椋の群

栗笑むや番犬耳をそばたつる

雑念はらふ曼珠沙華曼珠沙華

木犀降る眼の深き石仏　東京　飯塚トシ子

手を振れば手を振る園児秋の昼

木の実落つ土手の手前の一呼吸

保護色の八つ橋わたる飛蝗かな

鳩吹くや近くの鳩に習ひつつ

荒れ藪の野菊一つぞ誰か知る　東京　根來　隆元

おしなべて月夜のかげや濃りんだう

まんじゅさげなまぐさきほどくずれおつ

初汐や幾多の些事をかへりみず

身に入むや入日を惜しむ宙のさま

PDF= 俳誌の salon

自習室　現代の俳句を読む

小島良子

切株を抑へ込みたる西日かな　片山由美子

「俳句」九月号

木の切株には木の南面と北面との違いを見せて、はっきり年輪がみえる。木にとって、風雨と戦い只管成長を続けてきた歴史が、突然打ち切られ、白日の下に身を曝しているのである。

切株はじいんじいんとひびくなり　冨澤赤黄男

私達は、赤黄男の通ってきた新興俳句の詩精神の余光と次に人間探究派へと移る時代の屈折感を受け取ってきている。切株には、漠とした空しさが漂っているのだろうか。

掲句の切株には激しく容赦ない西日が射している。抑え込むといえば、抑えて動かないようにすることだが、どこかに、よく頑張ったねというような木への労りの気持ちが見える。林業であれば、伐出、更新、天然林という循環が行われる。この西日にも切株にも、自然の営みの力強さが感じられる。

花莫蓙を花撒くごとくひろげたる　由美子

花莫蓙を敷いて遊んだ子供の頃の記憶が蘇る。きれいな色に染めた藺草で花や景色の模様を織りこんであった。ぱつとひろげれば、ひんやりと藺草の匂いがする。「花撒くごとく」からは穏やかなあたりの空間まで見えてくる。花莫蓙は懐かしい。

PDF= 俳誌の salon

遠景をつなぎ止めたる曼珠沙華　亀田虎童子

句集『日常』

はじめて飛鳥路を歩いた時、蘇我入鹿の首塚の傍らに咲いていた曼珠沙華。朝鮮半島の高麗人が集団移住してきた高麗郷巾着田に群生していた曼珠沙華。いずれも鮮烈な印象であった。

人は歳を重ねると共に、嬉しい事楽しい事にも出会うが、身のほとりから色々なものが、ほろほろと抜け落ちてゆくような寂しさにも耐えねばならない。親しい人達とも別れ、記憶も薄れ、物事に対する情熱や関心も衰える。周囲の景がわが身から遠のいてゆくような思いである。

掲句は、その遠のく景が曼珠沙華によって我が身に繋ぎ止められているという。鮮やかな花の後ろには、まだまだ豊かな世界がひろがっている。高麗郷なれば高麗川の彼方には兜太の秩父も控えている。生きることの手応えが感じられ、気持ちが前向きになってくるようである。

裸木のなんじやもんじやは普通の木　虎童子

神宮外苑の「ひとつばたご」もなんじゃもんじゃの木と呼ばれる。佐藤好壷氏のエッセイによると、現在の木は三代目だそうである。根接ぎや実生から育てたりして、大切にされてきた。この木がさっぱりと裸木になると、皆と同じ次の春を待つ普通の木となる。この軽やかさが愛しい。

PDF= 俳誌の salon